

# 学校教育における農業体験の支援のあり方

西 敦子・岡田雅子\*

A Study in Support of Agricultural Experience in School Education

NISHI Atsuko, OKADA Masako

(Received September 27, 2013)

## 1. はじめに

学校現場では相変わらず子どもたちの食べ物の好き嫌いや偏食などが問題視されている。それらは子どもたちの心身の健康の問題につながるだけでなく、人とのかかわり、食のスキル、食文化と環境の問題にも深く関わる。好き嫌いや偏食をなくし、自ら食べることに楽しさを感じられる子どもを育てることは、健全な子どもの育成においてとても大きな意味をもつと考える。学童期は、体験学習や食に関わる活動を通して、食べてみたい、作ってみたい、もっと知りたい、そして誰かに伝えたいといったように、食への興味や関心が深まり、自分が理解したことを積極的に試してみようとする力が育っていく時期である。そして、思春期には、習得した知識や技術を応用して、自分の生活に生かしたり食生活上の課題を見付け解決したりするようになる。学童期に農作業に参加するなどの、食べ物に親しみや愛着をもつ経験をするのは、食を通じた子どもの健全育成に有効であるばかりでなく、生涯を通じて食生活実践力の育成の助けとなると考える。

本研究では、学校教育における農業体験をより充実したものにするため、学校の立場だけでなく農業体験を提供する農業者の立場からその在り方を考察することを目的とした。農業体験が子どもの食事に対する関心を高める効果があることはさまざま報告されている。例えば、大学生を対象とした調査で、野菜の栽培経験のある学生は「食物・野菜知識」「野菜の切り方」「家庭科食領域記憶度」「野菜摂取度」において高得点を得られている(岡田, 2013)。その一方、農業体験を提供する側がどのように考えているか、本音の声をひろった研究は少ない。そこで、農業体験を提供する側にある農業者の声を収集・分析することにより、現在行われている農業体験学習の現状と課題を明らかにし、学校と農業者の両者にとってよりよい農業体験を実現する手立てとする。方法は、フィールドワークを用いる。農業体験の提供者である農家やJAに出向いて観察、面接を行い、学校に対して、子どもたちに対してどのような思いを抱いているかを知る。それらを分析して考えられる問題点を整理し、これからの学校教育における農業体験の課題と好ましい支援の在り方を考察していくこととする。

## 2. 学校における食教育と農業体験学習の位置づけ

これまで、学校教育において食に関する教育は、家庭科が中心を担ってきた。生活科や理科の中で植物や動物の成長、社会科の中で地域の歴史と文化、保健体育の中で規則正しい食生活、

---

\* 萩市立多磨小学校

学校給食の中で栄養に関する知識などが教えられてはいるが、中心は家庭科である。しかし、残念ながら小学校教育において家庭科は5、6年の2学年だけに週1～2時間だけ設定された教科であり、専門の教師も少ない。中学校においても、各校1名の家庭科教員確保は困難な状況にある。家庭科教育担当者が食事の大切さや子どもたちの抱える問題を訴えても、学校文化の中では食事のことは家庭科の教科や家庭内で教えるべきことだという考えが大半を占め、学校全体で食育に力を注ぐ動きは、なかなか生まれなかった。

一方社会では、1980年代から食に関する問題が取り上げられていた。『なぜひとりで食べるの』（足立，1983）に発表された子どもたちが描いた食卓の絵は、衝撃的であった。一人で寂しそうに食べる姿や、お菓子が食事代わりの食卓など、食生活の実態が明らかになった。合わせて、すでに以前から存在した問題も、1980年代にやっと表にでるようになったのである。しかし、食教育の必要性を訴える声は大きくなったものの、これ以降、教育政策上の大きな動きとして改善されることはなかった。ようやく平成17年に食育基本法が設定され、食教育が広く国民的課題として認知されたのである。

それ以来、食に関する教育と農業体験を一連に学ぶ食農教育への関心がいっそう高まってきた。食育基本法の内容に農林漁業に関する体験の機会提供が明記されたことがそれを後押しした。JAの唱える食農教育とは「食と農と地域と自然の関わりを重視し、農産物がいのちを育み、成長していく過程を大切にしながら、食への関心・興味を高揚し、食の大切さ、食を支える農の役割、自らのくらしと社会の営みとの関わり、地域の食文化、いのちと健康の尊さなどに対する理解を広げ、深める。こうした取り組みを通じて、食と農、地域とJAを結び、食のあり方、農のあり方を変革していくことを目指す」ものである。食農教育への取り組みは、それまで教室で行われてきた食に関する教育や調理に農作業などの実体験を絡ませる授業を可能にした。学校における農業体験学習は、JAと連携することによって、まさに学校・地域一体型の学習を実現した。

こうした農業体験学習の実施は、家庭科の時間だけに収まらない。平成14年度から本格的に小中学校で開始された総合的な学習の時間に、食と農に関するテーマを採用する学校が増えており、学校・地域・行政が一体となって解決した創意あふれる取り組みが報告されている。実際に学校では、総合的な学習の時間や1、2年生の生活科、学級活動などの時間を使って作物を育てている。例えば、バケツで稲作り、畑でピーマンやトマト、なすなどの野菜を栽培した報告は数多くある。学校内で畑を使って育てることができない場合は、プランターを使用する、学校外の田畑を借りるなどしている。農山漁村での体験なら、豊かな自然や用水路・ため池など身近な水辺での遊びや水生動植物の観察など、自然や生き物とのふれあいを楽しむことができる。そして、それらの活動は、社会科で食糧生産に従事している人々の工夫や努力などの教材に生かす、収穫した作物を使って家庭科の時間に調理をする、PTC活動で親子料理大会をするなど、発展的に学校教育活動に関連づけられている。農業体験学習は、豊かな人間形成を図る「教科横断的な学習」といえよう。本研究では、学習の場として、総合学習を念頭に置いた農業体験学習を想定する。

### 3. フィールドワークによる調査活動の概要

#### (1) フィールドワークのプロセス

フィールドワークとは、社会的現実からデータを抽出する一つの方法である。フィールドワークについて、箕浦は「人の日常行動の背後にある文化は、当人にさえ感知されないくらいその

人の一部分となっていることが多く、質問紙調査や面接などその人の意識を頼るような研究方法では取り出せないことも多い。それをその人の生きている文脈ごとと抽出しようと試みるのが、フィールドワークである」。また、「現地に行って、何がしかのデータを得てくること、たとえば、関係機関で資料を収集し、現地を半日ほど観察してくる実地検分にも、地理学者が地形や植生を現地で観察し、自然と人々のかかわり合いを聞きとり調査することにも使われる」と述べている(箕浦, 1999)。本研究では、自らその方がおられる生活圏に向き、観察や面接を行う中で、農家やJA職員の方の「学校に対する思い」や「苦労」や「喜び」などを理解する方法をとった。フィールドの人の話や行動の細かい観察からフィールドノーツを作成し、その後、カテゴリーと属性を見つけてデータ分析し考察することとした。

第1段階は、フィールドでの観察と面接、第2段階は、フィールドノーツの作成、第3段階は、データ分析と考察である。

## (2) フィールドノーツの作成

フィールドから帰り、メモをもとにフィールドの状況をできるだけ正確に復元した記録がフィールドノーツである。会話の口調まで写し取り、フィールドに居合わせなかった人でもその場のその時の状況や雰囲気を追体験しうような記録が理想であり(箕浦康子, 1998)、記録するときの原則としては、①誰が言った言葉かを同定して記録すること②相手が話した口調を写し取るように記録をすること③具体的に書くことの3点に留意した。本論稿では紙面の都合上、抜粋した一部分のみをフィールドノーツとして示すこととする。面接の時期は平成24年10月～12月である。

### <フィールドノーツ1 JA山口中央 青壮年部代表Nさん 50歳代 男性>

芋さしと芋掘りの打ち合わせは、1ヵ月前に先生にお誘いの話をするんです。行事の前は、毎日天気予報ばかり見るようになります。もう一週間前くらいからずっと見よります。雨だと子どもだから、濡れたらできんですもんね。

今年行ったのは10月25日です。子どもたちを並ばせたりするのは、学校の先生です。畑に12畝あるんですが、それぞれ子どもたちを並ばしてもらいます。農青連が芋の説明をするんです。芋の花は紫の花で、朝顔みたいな花が咲くんですよとか、芋は何科、原産地、どのような掘り方をするかなども話しました。また、食べ物の命を大切にとか、農業の重要性についてもしゃべります。「ご飯を頂くときに感謝して下さいよ」とかですね。やっぱり農業の重要性を言わんといけない。子どもたちが畑の前通ったとき、「ああ、この前芋をほったな」とか思い出してくれることを望んでいる。こういうことがいつかわかってくれると思って言っています。

K保育園からは毎年、お礼状がきます。芋を掘る絵をかいた手紙が、届くんです。そりゃあ嬉しい。続けていこうという気持ちになりますよ。私が今も続けられるのは、園児や先生が私を覚えてくれることかな。よく声をかけてくれるんですよ。「あのおいちゃんじゃあ!」とかね。先生もよく覚えてくれるんです。

活動経費は、去年からO交流センターのO街づくり協議会に申請して、助成金を頂いています。芋づる3000本、1本25円として8万かかるんですよ。あとマルチ、肥料とか、芋がゆを食べるための発泡スチロールのお椀、スプーン、ガスなども経費としてかかるんです。それらのお金は今まで農青連が全部出しておったんです。学校や幼稚園からはもらっていません。ほとんどボランティアよね。自分が責任者になったら、全部皆せんにゃいけんから大変なんですけ

ど、困ったということはないです。そう思えるのは、農青連のつながりが大きいと思いますよ。

### <フィールドノート2 JA山口中央 青壮年部Yさん 60歳代 男性>

学校との打ち合わせは、田植えの前に打ち合わせをする。学校の都合と農協の都合と農青壮連の都合を日にちの都合を合わせて。回数は1回です。

芋より、稲作のほうがおもですね。稲は植えてからどういうふうに管理していくか、と考えることややることが多いんですよ。耕さないといけないうし、土地をひっくりかえしてすきこんだり、水を入れて代かきをして肥料をまいたり、ほとんど農青壮連がやります。約3カ月間で一番大事なのは水の管理で、水があたるように関をとめたり外したり雨によっても左右されるから大変です。危ない面もあるから、子どもたちにさせることはできないんですけどね。

でも本当は見せたいんですね。子どもたちは田植えてから自然に稲ができてしまうんだろうと思うからね。農家の子どもはわかるんだけどね。そういうことは農青壮連から話がでています。見に行くだけでも違いますよね。すごい成長が早いからね。稲刈りを皆でやったけど、子どもたちはもみがお米になる作業を知らないから知っておくといいね。あとご飯になるまでの過程も知るといいんじゃないかな。

品種はニコマルという稲を小学校では植えているんですよ。すごく遅く実る稲なんです。この辺は10月の始めまで稲刈り出荷で忙しいんですよ。はやもの（早く実る稲）と中ぐらいと遅く実る稲があるんですよ。それが10月の始めに終わりますから。またそれを出荷しないとけないんですからね。自分のところの作業がほとんど終わってから余裕ができたときに、今年は10月の24日でしたよね。先生とお話して打ち合わせしました。

稲刈りで一番気をつかったことは、カマを使ったりすること、コンバインに近づいて怪我をすること。直接稲刈りとは関係ないけど大事ですね。

子どもたちには、やっぱりお米を食べてほしいなと思いますね。ずっと日本の食料の自給率が40%きっている、ということは外国からきとるということですよ。危機とかあったら賄えなくなる。そういうことに対する危機感をもってほしい。農業に携わってほしいとかは、気持ちはあるけど、やっぱり生活できる所得がないといけんから難しいよね。農業ってのは一生懸命やってもそんなに所得がないからね。

学校に対して望むことは、汚いことを言うけど、理想と現実がやっぱりありますね。学校の先生方ときめ細かに打ち合わせをしながら、お互いが関わりあって、感謝の会があって。これは理想ですよ。我々の農青連の立場から正直言うと、そんなこと面倒臭い。そんなこと関わっちゃれない。それじゃ本当はいけないんですけどね。理想と現実を埋めようとしたら、やはりお互いの信頼関係が大事だと思う。先生方ともコミュニケーションをとりながら。私たち農青連、女性部が学校のために、子どもたちのために一肌脱いで、子どもたちのためになるんだったら、頑張る。ただ行事をこなすだけだったら、どうでもいいやん。なんでこんな面倒臭いことするんだ、という思いが今は少しある。だから稲刈りのとき5~6人しか来てないよ。女性は集まっていこうというのがあるんだけど、男ってのは勝手なところがあって(笑)そこらへんのギャップもある。先生の言われることだから、手伝ってあげよう、やってあげようという関係にならないとね。

それにはね、先生が、子どもたちと一緒に見学したり田植えをしたりするのは大事だと思いますよ。黒板で勉強するだけでなくね。あとはその土地の人と信頼関係を築いていったらいいと思います。それはね、やっぱり地域行事は必ず参加するという事なんです。やっぱり皆見

てますよ。ああこの人はただ話すだけで全然現場来てないなあとか。小学校の担当の先生は平川祭りにきていましたよ、「お世話になります〜！」とか言ってね。

### <フィールドノート3 JA山口中央 Mさん 70歳代 女性>

H小学校の5年生は、平成11年から米作りを続けているのよ。最初は農協や農青連から案内をして、それがずっと続いているんです。やめれなくなったの(笑)。低学年の子も草刈りしたり稲刈りしたり、自分たちも5年生になったらできるんだと楽しみにしているからね。でも、すっごい楽しみにしているから、頑張らなくちゃね。

芋掘り、稲刈りとか打ち合わせは4月にします。担任が変わるから、5年生の先生たちと、校長先生、青壮連盟の男性の方、Hさん(JAの学校関係の活動をお世話をする人)とかで、およそ何日にするかとかを学校に出向いてお話するんです。まずしっかり同じ学年の先生と話しかうこと。そしてJAに働きかけたら、JAの方が探して下さると思うよ。

その年の学級によって、行事だけで終わらないんです。班に分けて、水のゆくえを調べたり、微生物を調べたり、収穫したお米でお料理を作ってくださいの。7、8人の班で全部料理違ったりするのよ。あとカレンダーを作ってくれたり、いろんな発表したりするのよ。あと私たちが青壮連の方と授業にでるの。稲刈りのあとね。もう質問がすごい！昔の農機具の話とか、お米のこととか。先生がもう時間よととめるぐらい。すごいですよ。だからこっちも勉強していかないとイケないの。当日気を付けることは、稲刈りでカマを使うことかしら。やっぱり怪我があつてはならないですものね。

農業体験の件費ですか。それは頂いてないですね。ボランティアです。皆が集まるのが楽しいのよ。昨日の祭りとかもきつかったけど、やりがいがあるのよね。学校からお礼は、あのおとき配られたお菓子とお茶くらいですね。あと食事会を開いてくれたり、太鼓をたたいてお祭りとかをしてくれるかぐらみたいなの作って感謝の会を開いてくれたのよ。

### <フィールドノート4 JA山口宇部 支店長Nさん 50歳代 男性>

農業体験をしたいと思うなら、先生が自ら農家に出向いて直接話を進めていくことになりませんか。そのときに大事なのは、子どもたちにどういふ体験をさせたいのかということです。でも、見ず知らずの人にお願ひされてもなかなか難しいだろうから、知り合いになっておいたらいいでしょうけど。こういう意図で子どもたちに農業に関わることをさせたいんだという思いを伝えて、受けて頂ければ大丈夫。それか農家に直接お願ひすることになる。ここに言わなければという関所があるわけやないからね。

小学生っていうのは苦労だけを押しつけたらだめと思うんよね。やっぱり子どもはね。えらい(つらい)のは、えらくないほうがいいじゃん。楽しいのは、楽しいほうがいいじゃん。子どもたちに苦労をおしつけてもだめですわね。やっぱり、子どもたちは苦労は半分、喜びが2倍やないかね。そうすると、またやろう！とか継続できますよね。体験をしたあとにおいしいものが食べられたとか、たくさん収穫できたとかそういう体験が子どもの心には残りますよね。

掘った芋を集めて、それと同時に別でふかし芋つくっておいて掘ってすぐ別のところで食べるという。小さい子どもだったら、よう掘らんとするんよね。土は固いし芋は大きいし重いからね。だから頑張って掘り上げたという努力の農業の大変さと喜びを知ってもらうのが一番いいんじゃないかね。低学年であれば一日と短い期間で終わるといいね。5、6年なら観察能力があるじゃない。今日植えました、10日後成長しました、また一か月後には穂が垂れてきま

したとか、植えてから体験をみせてあげんといけんよね。高学年は、その観察力を生かして長いステップの中でやっていくのがいいよ。

あとやっぱり、先生と生徒が一緒になって満足せんと無理と思うよ。先生も初めての体験じゃから。でも先生と生徒が同じ程度学ぶじゃいけんから、先生も事前に試行錯誤で頭に入れた中で、野菜がどうやってできるかとかを知識として知っておかんといけんよね。ある程度指導できるくらいの中身をもっておかないとね。でも、説明は植えてくれた農家の方がしたほうがいいと思いますよ。先生が説明するのは、先生は実際に育てたりしていないから、子どもたちは実感がわかんですよ。自然にこの芋ができたんじゃないよということ、種を植えて水の管理をしながら、大きくなってきたんですよという。ちょうど芋を食べるいい時期になったので、皆に食べてもらおうねと説明してね。皆に手袋はめさせて、シャベルを持たせて、農家の人や先生が掘り方を見せながらするといいいね。

### <フィールドノーツ5 JA山口宇部 Oさん 70歳代 女性>

こちら辺の学校では、学校給食に地元で作った味噌を使っているんです。農協の営農の担当の職員さんに大豆ができるまでを話して下さいと言われて、学校に行きました。学校に行くのは抵抗がないですよ。人に自分がしたことを言えればいいからね。

大豆のできた製品はどんなものがありますかとかいうのを子どもにたずねてね。そうしたら子どもがいろいろ言ういね。子どもに話をするのは、大人に話すのと全然違いますよね。子どもにする話はおおまかにしか話ができんからね。あと自分が子どもにならんにやいけんもんね。「こんな小さな種でもどうやって芽が出るんかね。みなさんのこの可愛いもみじのような手のような芽が出る。みなさんに食べてくださいいねと願いをこめて芽を出してんよ。だから心をこめていただきますといいましょうね。」言うてね。子どもたちからは、すごいたくさん質問がくるんよ。例えば、「おみそ一年間にどれくらい食べるもんなんですか」とかね。そんなのはわからんいね。子どもは思ったことを言うから、わからない質問をされたら、「そこまでわからんからお勉強してくるね！（笑）」と言うんです。豆博士という子が学校において、その子はよう勉強しちよる子もいるんですよ。やっぱり、子どもたちと触れ合うのは楽しいですね。

その地でとれたものをその地で食べることが命を守っていく上で非常になじむと思います。その土地で作られたものが人間の身体にそぐうちよるというかね。外国の安い、大量生産したものを食べる人が多いけど、どんな人がどんな風に作ってるかわからんですよ。今はいろんなところものがスーパーとかで手軽に手に入るけど、大都会の人は何を食べても一緒だと思っている。やっぱり私たちは、自分たちが愛情をこめて作ったものを食べよったら、外国のは選ばれません。その作った野菜は匂いがわかるのね、ねぎの匂いがする、トマトの匂いがするとかね。鮮度も全然違う。食は命なりでね。子どもにはそういうことを伝えたいですね。

### <フィールドノーツ6 JA山口宇部 Fさん 70歳代 女性>

学校の対応も様々なんですよ。すっごい協力的な学校で「ありがたい」と感謝される学校と、「やって下さるのであればどうぞ」という学校もある。学校が自ら「やりましょう」という学校もあれば、「JAがやればやってもらいたいです」とかあるんです。

私たちは二つの小学校に行ったんですよ。芋掘りのときは全部農協が準備したり、今まで全部農協が負担してきたんです。もう少し協力的なことがほしいと学校にお願いしたんですよ。そうしたら「考えさせてくれ」と言われた学校もあって、そのときに「経費は国からでている

んじゃないですか」と学校から言われたこともありましたね。そんなこともあって、ある学校はやめられたんです。

昨日も6年生でこんにやく作りをしてね、校長先生、教頭先生も皆いらしてね、それこそ学校が一つになった状態ですよ。その学校は、学校の中に田んぼと畑があるんですね。そこで今年はこんにやくを作ったんです。今年はこんにやく芋が1年目ですからね、小さいですから別にこんにやく芋を買って教えました。もう好評で大成功やったですよ。芋の生を切ってから湯がいてから皮をむかしてね。ゴム手袋をさせたんだけど、子どもたちは「手がかゆい、かゆい」と喜んでやってました。(笑) 試食のときにはね、お醤油味とみそ味と準備したんだけど、こんにやくじゃなくてお味噌がおいしいおいしいと言ってね、こんにやくもいいけど味噌もいいと言ってお味噌ばかり食べてた。(笑) 自分で作るからおいしいんだろうね。

当日の進行は、先生は見ていて、女性部が進行します。始めにお母さん方がきていらっしやるので、私たちの協力をしてもらうために説明をします。お湯を使うから、火傷をしないようにと、それを一番最初に約束しました。学校への要望とかはその都度言っています。例えば、お湯がわくときが危ないから、お母さんを半々役に分けて見てもらっておくとか。何にしても話し合いですよね。ふざける子もいますからね、男の子がね。寝そべってから、その上にまたがりになってね。「火があるのよー、湯があるのよー！」とって怒るとパッと起きてやるんですけどね。男の子は一緒にやろうというのがないからね、先生が来てから「〇〇くんやり！」と言ってやるの。ふふふ(笑)

あと、子どもたちは説明のとき話は聞かない、聞かない、ふふふ(笑)。でも子どもが一生懸命やって「あーえらいえらい」って汗びっしょりになってね。(笑) だけど「ようがんばったね」とほめてやったり、言葉のかけかたで全然違ったりするよね。稲でもね、束ねるとバラバラになってるからね、こうしてこうやるんよって言って一緒にやります。学校に行って子どもたちがもう喜んで一生懸命する姿を見るとね、「ああ、がんばらんといけん」という気になりますよね。素直ですからね、ああしてこうしてくれというとき始め言うことかんですけど。言ってからちょっとはきくけど、また後はきかんですね。ふふふ(笑)

学校の中に田んぼやら畑がないところは、バケツ苗でやっていましたよ。どろから全部こっちが準備して苗を3本植えて、それを観察させる。これを刈って、竹ではぜをつくってかけさせて、というのを農協が全部してね。学校が全然してくれなかったら、準備も何もかもしたからね。こっちも腹がたちました。

### <フィールドノーツ7 JA山口宇部 Sさん 70歳代 女性>

最初は、孫がA保育園でお世話になりよったから引き受けました。場所の便利がよかったからというのもあるけどね。道路も広いし、車がめったに通らないから危なくないんです。子どもが急にとびでるような場所でもないからね。

その日の朝や前の日、周りの草をかって、犬のフンとか踏んだらいけんからね。心の準備もせんといけん。天気も気にしますね。夜雨が降ったらいけん、くもっちゃうとかね。前の日からつるを切っちゃうこともある。子どもたちにその苦労はわからんでしょうね。

当日はここからここまで掘っていいよといって芋を掘ってもらったの。でもみんな踏みじんだにしてから、掘ったあと掘り返すのが大変でした。子どもは芋がみえたと思ったら、一生懸命掘るけど、ちぎれたりそのちぎれたのをそのまんまにしちよるから掘り返すのが大変だったよ。あと「ここまで掘ってもええよ」といっておいても、一人が範囲以外をほったら、皆掘り

ですからね。気を遣いよりました。

私がホームステイを受け入れたときね、1週間ほどM高の女生徒が一人来ました。ずっと寝泊まりと食事と仕事を一緒にしてね。朝から晩まで仕事をしてね。途中先生が二回くらい見に来てんですよ。そのとき私のところは、ちょうど施設でトマトやってたのよ。米はね、あんまり手伝うことがないときやったからね。その子に何かをさせようかと思ったら仕事をつくっちゃよかんといけんのよ。そのときの失敗談なんだけどね、トマトの芽を摘んでくれないかねと頼んで、その子に芽かりをさせたとき、芯をのこさんといけんのに、芯も横芽も全部つんじょったんですね。その子も「おばちゃん、おわったよ」といって、「次は何するの」と言いに来た。でもその芽がつまされた状態をみて、まあ、さてどうしようかと思いました。自分は全部知っているから、1から10まで教えんといけないということがぴんときんやっただです。気が付いたらもう手遅れで、さてどねえしようかいという状態でした。その子を怒ってもしょうがないし、私も教えようが悪かったから、私もええ体験なっただと思っています。そういうことがなかったら、私もわからなかったです。その子が来てくれたから、そういう体験ができた。芽がつまされた状態をみたとき、ドキーンとしましたよ。やっぱり人にものを教えるというのは1~10以上ゆうちょかんといけん。その子も悪気はなくて、その子も早くせんといけんと思っただやろうからね。

#### <フィールドノーツ8 下関市 農家Hさん 70歳代 女性>

きっかけは、息子が商業高校に勤務していて「誰か土地を貸してくれる人はおらんかね。」という話があったんです。それでうちがいいよっていつてから始まりました。どういう授業がわからんけど。やっぱり息子と先生が来やすいんじやろうね。それに高校の近くに田んぼとかないみたいやからね。「この日にしましょう」とか打ち合わせはなかったです。おふくろ明後日どうかねとか息子が聞いてきて決めました。

米作りとゴマをやりましたよ。ゴマは種まきして、芽が出たら、草取りとか追肥してとそのぐらいしか手間がかからないの。花が咲いて、実になったら、消毒やらせんでいいからね。ただ、収穫が大変なのよ。泥が入ったらいけんの。

最初高校生が来てくれたときは、米作りから始めました。田植えなどの泥仕事は私がしたけど、種まきもきてくれちゃったかな。先生が生徒を車で連れてきちゃったんです。確か米は6~7人で、ゴマは2人だったよ。商業高校だから、ゴマを黒ゴマそうめんの商品にするために作ったらしいの。その高校は鹿児島と交流していて、こっちで作ったものを鹿児島で販売したり、鹿児島のをこっちで販売したりということをしたらしいんです。その販売がすごい評判がよかったですよ。

使った田んぼは、一町のわずか。10分の1くらいかな。でも、60キロほどあげた。全然私のところの収穫がへるとは思わんけどね。肥やしも薬も全部こっちもちだけど、学校からなんの音沙汰もなくてね。あれはやっぱり先生がわかっちゃなかったほいね。ゴマくらいならいいよ。でも60キロだったら、1万6千くらいするけえね。でも商品にして貰もらって新聞に出たから、頑張っちょるんかなあと思っただね。ほとんどボランティアだね。でも、子どもたちに喜んで帰ってもらえたら、最高！お金はもらわんけど、それでまた製品つくってもらって楽しんでもらえたらいい！

(気を遣ったのは) 高校生にどういう対応してええやろうかという心の準備があるのと、家も片付けちょかんといけん。例えば、水道が外になかったら、洗ったりするとき、お風呂で洗っ

たりするから、家を片付けたりね。あとは高校生が着替えをするところを考えておくとか。田んぼにはみ（へび）でもおりそうなどろがないかとか、見ちょかんといけんからね。

どういう野菜とか、稲やったら、育てやすく提供しやすいかね。スイカ、かぼちゃ、きゅうり、なすは、花が咲いたらすぐ実になる。実になったら、1週間10日で収穫できるものがあるけえね。白菜、大根、キャベツなんかは、半年かかるけえね。

いずれにしても、先生がそういう作りかたとか野菜についてわからんとね。きゅうりもこねえに大きくなってね。適期が過ぎてから、「もがんにゃあ」と先生に言ったんだけどね。田んぼでも、草のけて、すいて、肥やしふって、畝をつくるっていうか、そこまで先生と合わせると大変やけえね。だからこそ、見えん部分も知っておいてほしいですね。ゴマでも一番大変なのは、収穫のときで、たたいてごみ一つも取ってやっているんです。

#### <フィールドノーツ9 光市 兼業農家 もちつき保存会会長Kさん 70歳代 男性>

「保存会」やから、子どもが小さいときにもちつきを見てもらって、知ってもらって、細く長く続いてほしいと思ってね。米作りからもちづくりで食べるまでを体験してもらおうと思ってやっています。腰の痛いのも体験してもらって、一連の作業をしてもらっています。

前には苗から育てて刈り取り、はぜかけをしてましたけど、今は、子どもさんに植えてもらって、刈って、束ねるのをやってもらっています。

学校の体育館の近くにある田んぼを私が借りてやっています。農家さんが水の管理をしてくれるんよ、やっぱりその農家さんのあんばいがあるからね。

作業に入る前に怪我をしない方法とか、束ねるときの要領とか実演して子どもたちにみせます。じゃないと束ねるとき投げ出すんですよ。手間が何度もかかるからと子どもたちについて説明します。先生には子どもの怪我をさせないように見てもらったり、言ったとおりにしているかを見てもらっています。カマが5、6丁あればできるけど、今は学校で15〜20ちょう購入して、のこガマを使ってやっています。

米は農家のもちものであるんで、それから保存会がお金で買い取ってもちつきに使っています。学校もただじゃ迷惑なろうからと心配されて、保存会のほうへお金を下さるんです。

終わった後ね、お世話になりましたとか、毎年同じようなこと書いてあるけど、子どもたちが感謝状を書いてくれるんです。あと、田んぼで仕事しよって、「おはようございます」とかね、声をかけてくれる。私を覚えとってくれてですよ。でもそれらは中学校までよ。大きくなるにつれて恥ずかしいかね。ちょっと離れたところで仕事をしていても、声をかけてくれないから「おかえり」と私は言うんです。「あいさつせんか」とも言われりやせんしね。でも、先頭をきって学校の先生が進んであいさつとかせんといけんのいね。来られる人にはあいさつするのは当たり前だけど、そうでないときにもつながりをもつことは大事ですね。

#### 4. エスのグラフィー（フィールドワークのまとめ）

フィールドワークで集めたデータを分析・解釈した報告書がエスノグラフィーである。それは、JA職員や農業者がどのような生活世界にいるのか、農業体験に関してどのような考えを持っているのか、その人の文化を描くことである。

フィールドノーツから得たことを、図1のようなカテゴリーに分け、考察した。

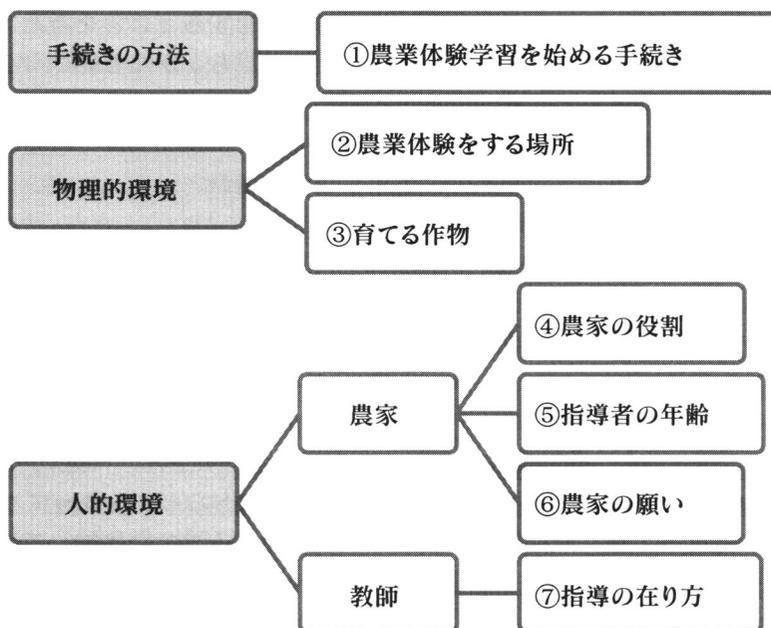


図1 面接結果の属性とカテゴリー

### ①農業体験学習を始める手続き

農業体験学習を始めるときは、学校から農家やJAに働きかける場合と、農家やJAから学校に働きかける場合の両方がある。現状では、教師が知人や保護者から、農業体験の場を提供してもらう場合が多い。

学校から農家に直接働きかけた場合、教師が地域と顔なじみであれば、交渉に取りかかるのは簡単である。教師が地域に入り、地域の中で人間関係を築いておくことが大切となる。

学校がJAに直接働きかけた場合、JA山口中央のように、青壮年部や女性部を紹介してもらえる場合もある。これはJA山口中央がブロック制の仕組みをとっており、青壮年部、女性部にそれぞれJA事務局の担当がいるからである。また、地区によってはJAを通す必要がないところもある。JA山口中央の事務局の役割は、JA山口宇部では営農センターが行っており、これは地域、支店の規模、地域の数によっても異なる。地域それぞれの仕組みがあることを理解し、地域にあった方法を柔軟に探していくのがよい。

次に、農業体験をする際に、打ち合わせが重要についてである。この打ち合わせ方法は、電話や直接会って行うところが多かった。学校とJA、農家が時間とって話し打ち合わせをするのが理想だが、農家にとっては本音としては電話で簡単に済ませたいという気持ちもある。自分のところの農業もあり、それに加わって人づきあいが増えるということに、少し面倒を感じるということだ。そのため、学校側が相手の予定を聞き、どのような方法を望むのかを尋ねてから打ち合わせの方法と内容を決めるとよい。特別な場合として、知人や保護者から紹介を得た事例では、親しさゆえに連絡回数が少なくても可能になる。学校側が子どもたちに十分な指導をしていることや、受け入れ人数が少ないなどの条件を満たすことが必要となるであろう。

### ②農業体験をする場所

農業体験で使う田畑などの場所は、学校内がよい。学校外に田畑を借りる場合は、できるだけ学校に近いところがよい。近くに体験場所があれば、子どもたちは作物が育つ過程を目にす

ることができるので、収穫できるまでにどれほど日数がかかるか、どれほど人の手が加わっているかを自然と学習できる。子どもたちの近くに作物があり、その生長を確認できる環境であることは有効である。田畑がない場合は、プランターやバケツ稲を育てる方法もある。この農業体験の場所を得る手段は、農家の方に直接承諾を得る、JAに空いた土地を紹介してもらうなどである。農業人口の高齢化で耕作放棄地が多く、その場所の活用や管理が必要な実情があることから、使わない畑や田んぼを使わせてもらうということができそうである。

場所選びの視点で留意することは、遠い近いに関わらず、場所を借りる場合、道路が隣接し、教師や保護者などの車が駐車できる場所があるか、周辺に危ない場所はないか、子どもたちが荷物を置いたりお弁当を食べたりする場所があるか、トイレや休憩する所があるか、着替えをする所があるかなどである。子どもたちがより安全に活動を終える場合には、とくに交通量には注意したい。また、農家の私有地や私有物を借りる場合は、環境を整えるために細かい心遣いや負担を相手に課していることを知っておかなければならない。

### ③育てる作物

育てる作物については4点から考察する。

**1点目**は、学校周辺の地域性に合うものである。調査では、米、さつまいも、ゴマ、こんにゃく芋、夏の野菜づくりなど様々に取り組んでいた。その地域によって、また、どのような生産農家がいるかによっても、異なっている。例えば、光市もちつき保存会のKさんは、地域でもちつきの文化を大切にしていたことから、米作りの体験やもちつきを提供している。このように農家が何を育てているか、大事にしているか、その土地で何がよく栽培されているか、など特色がでる部分である。この特色を生かして学ぶことは、地産地消や住んでいる地域の伝統や文化を学ぶことにもつながるだろう。

**2点目**は、学年に応じた作物であることが望ましい。低学年では短いスパン、高学年には長いスパンで作ることができるものである。なぜなら高学年であれば、観察力もつき、長いスパンで植物の生長の変化に気付くこともできる。例えば、「春に植えた野菜が日々の変化を経て実った」「田植えをした穂がどんどん黄金色になっている」などである。そして、手間や努力が必要なことも、それを乗り越えて達成したときに喜びを感じることができる。一方、低学年では「芋が掘れた」「焼き芋を食べておいしかった」などの体験自体に喜びを感じるという傾向がある。「低学年では、芋掘りをしたあとにすぐに焼き芋が食べられるように、芋を掘ると同時に芋をふかしておく」のような、短期間で活動できる工夫も必要かもしれない。子どもの発達段階によって、学びの質が異なることに留意しておく。

**3点目**は、家庭科教育の視点から、調理まで考えられるものがよいと考える。小学校段階では炒める、ゆでる調理などが考えられ、調理実習ができる食材だと家庭科と結びつけて学習でき、野菜や穀物についての栄養価を学ぶことができる。さらに、たくさん収穫できる作物であること、子どもたちが楽しんで食べられる作物であることも考慮したい。例えば、甘くておやつにもなるさつまいもや、私たちの主食で身近な米、もちつき体験ができるもち米は、作ってから食べることで楽しめる。年間計画を調整して、育てる～作る～食べる活動を実現させたい。

**4点目**は、活動時期が適切なことである。子どもたちが作物の生長に落ち着いて関わるのできる時期に育てられるものがよい。例えば、運動会で忙しい時期に十分な時間を確保することは困難だろう。農家にとっても、忙しい時期は避け、適切な時期がよい。実際、米の品種は、農家と相談して早生や晩生を選び、家の稲刈りで忙しい時期に重ならないようにしてある。

#### ④農家の役割

農家の方は、農業体験を自分の仕事の一部と考え、その多くはボランティアである。農家側の役割は、準備、当日、後日の仕事に分けられる。まず、芋掘りまでの準備では、畑の管理、整備などである。子どもたちが掘りやすいように土を掘り、前の日から周りの草を刈って、犬のフンなどを取り除く。天気もチェックする。天候によって中止になることがあるし、作業しやすいように環境を整えることも必要になる。配慮事項は多い。日常の畑の管理も、学校外に田畑がある場合は、農家側がしているということが多い。芋掘り当日は、農家の方が子どもたちに育てている芋について説明したり、子どもに掘り方を教えたり、実際に農作業について指導する。そして芋掘りの後日に、子どもたちが掘り返した畑をきれいに整備する必要がある。子どもは一生懸命掘ったつもりでも、芋がちぎれていたり、掘り残しがあったりするので、その後の管理は欠かせない。

これらの仕事には時間もお金もかかる。肥料代、水道代、苗代、調理するのであれば食べる容器なども農家が負担していることもあることから、負担が重くなりすぎないように注意し、特に経費については合意しておくことが必要である。

#### ⑤指導者（農業体験提供者）の年齢

農業体験学習の指導者を引き受ける人は、仕事や子育てが落ち着いて、第2の人生を歩もうとする人が多いようである。役立ちたい気持ちはあっても、生活にお金と時間の余裕がないとできない。依頼のときに考慮するとよいであろう。実際に面接した現在60代、70代の方も「働いているときは余裕がなかったから、青壮年部や女性部に入るなんて考えられなかった」と言っていた。また、80歳代のNさんは足腰が悪いのでできない、というように、体力的なことも配慮しなければならない。

#### ⑥農家の願い

農家の方は、子どもたちを喜ばせたい、楽しませたいという思いでいっぱいである。せっかくの体験が雨で思うように活動できずがっかりすることのないよう、Nさんは1週間も前から天気を気にしている。雨が降りそうなときは、3回予定を変更したこともある。Mさんは、子どもたちが「すごい」楽しみにしているからやめられないと言う。Mさんの目に映る子どもの笑顔は「すごい」ではなく、はじけるような「すごい」笑みなのであろう。だから、頑張らなくてはその気持ちになる。Fさんは、子どもたちがすぐに飽きて説明を聞かなかつたり寝そべって怠けたりする様子を「ふふふ」と笑いながら語っている。その様子から、要所で一生懸命な姿を見せる子どもたちに、満足し、愛情を注いでいることが想像できる。Sさんは、せっかく育てたトマトの芽をすべて摘まれ、どれほど情けなかったことか。しかし、憤慨して生徒を責めるでもなく、その後も体験を提供している。また、Hさんは予定外に無償で米60キロを提供したことを受け入れ、お金をもらわなくても楽しんでもらえたらいい、と結んでいる。このように、自分に割の合わないことがあっても受け入れられるのは、子どもたちの喜ぶ姿にやり甲斐を感じているからにほかならない。子どもたちとのみでなく、保護者や農家同士、地域での交流を楽しみにする人も多いと聞く。人と関わって何かを成し遂げるとか、誰かの役に立つことがしたいという願いがそこにある。それゆえ、ボランティアができるのである。お礼の会に都合をつけて出席することは、人によっては煩わしさを伴うが、それでもつきあっているのは、子どもたちの気持ちに応えたいという優しい思いからと推察する。

地元の米や野菜を食べて欲しいという願いもある。難しい内容かもしれないと知りながら、植物の原産地や自給率やTPPの話もするそうである。今はわからなくても、記憶に残って

いく、思い出してくれることがあるだろうから、と自分を納得させながら話している。理解できないと思っていても言わずにはおれない農家の心情がそこにみえる。地産地消を訴えるのは何故なのか、農業者としての切実な願いがあることも、また事実であるようだ。

また、JAや農家の人には、それぞれの思いがある。それが私たち教育者の意図と違うところにある場合もある。学校側は、体験学習、食育の一環として農業体験を行っているつもりでも、農家側には「女性部に人手が足りないので組織に入ってほしい」「もちつき保存会に入ってほしい」、また、「子どもたちに地元のお米を食べてほしい」「小学校にあがったときに共通の話題になってほしい」などである。この思いを尊重し、学校からの一方的なお願にならないよう、考慮するのがよい。

### ⑦指導の在り方

**第1**に、教師自身が学ぶ姿勢をもつことが求められている。教師は普段の仕事に加え、野菜を上手に育てる術を身につけるのは難しいかもしれない。しかし、農家の方に全て一任では、教師としての努力が足りないと思われ、信頼関係を損なう場合がある。Hさんは、ボランティアで小学校の畑の世話に行った際、学校の教師が適切な時期で野菜を収穫しなかったため、野菜が大きくなりすぎていたことがあったと話している。教師も新たに学んでいくことが多いだろうが、積極的に情報を得るように努力していく必要がある。

**第2**に、教師は野菜や米の相場なども知っておく必要があるだろう。農家の方は、自分のところの収穫が減っても子どもたちにあげる分には構わないと言うが、収穫数の少ないものや高価なものは子どもたちに任せることはできないとも言う。収穫した米を学校に60キロもあげたが何の音沙汰もなかった例は、農家にとって、忘れがたい記憶である。教師が物の値段などを知らなかったのだろうとHさんは言っていたが、知らなかったでは見過ごせないこともある。教師は農家の善意に対して、失礼や甘えすぎをなくさなくてはならない。

**第3**に、安全管理についてである。農家の方は何よりもまず、子どもたちに怪我がないようにと配慮している。具体的には、稲刈りのときのカマの取扱いや、こんにやく作りの調理の火の扱い、交通事故である。子どもたちは普段と違う環境におかれると興奮ぎみになるので、事故につながりやすい。怪我や事故防止のためには、約束事を決めたり、活動前に気持ちを落ち着かせる時間をとったり、工夫が必要であろう。道具の使い方については、当日の説明があるが、集中して話を聞く集団に育てておくことは、教師の務めである。

**第4**に、当日の進行においては、JAや農家が担うことが多い。教師が説明するのでは、子どもたちに新鮮味が伝わらない。ここは、農業のプロである農家に任せるのがよい。地域の人のお話が聞けるといふ場はとても貴重である。カマや移植ごてなどの道具の使い方についても、当日JAや農家の方が説明する。ただ、農家の方は、普段の学校の子どもたちを知っているわけではなく、関わる時間も少ないため、子どもたちの様子を知らずに話すことになる。農家の方は話をする経験の少なさから緊張し、どのように子どもたち説明すればよいのか、悩むこともある。教師であれば、話すときに子どもの注目を集めるとか、子どもたちの興味を教具などを用いて引き出すという工夫をする。そこに教師に出番がある。ずっと静かに説明を聞くよりも、写真や実物を用いて、そしてできれば紙芝居などの小道具があれば子どもの興味はぐっと高まる。光市のKさんは、もちつきの歴史などを紙芝居を作ったらどうかと試行錯誤された経験がある。そのときKさんは、絵が上手な友人に頼んだが、断られたため成立しなかった。もしかしたらKさんは、子どもたちに見せる絵が上手でないといけないとか、絵が描きたいけど得意でないと考えたのかもしれない。その点で言えば、教師は教材作りが専門である。農家の方が

思い描く教具を作成するなど、農家と教師が連携することも考えておきたい。

第5に、田畑の管理である。学校から遠くに田畑があり子どもたちが管理できない場合は、農家が管理をすることが多い。それでは、子どもたちにとって「種まきや収穫が楽しかった」だけで終わってしまう可能性がある。そうしないためには、育成途中を観察できるような工夫が必要である。教師またはその代理が、作物の育つ様子を写真や動画で撮影し、子どもたちに見せるのも一つの方法で、生育の変化がわかるようにすることが重要である。子どもたちが世話をしていないときも、多くの人の手が加わり、収穫までに日にちもかかるということを実感する手立てを考えたい。子どもたちが、地域を知り、地域の人と関わるのがきっかけで、地域の野菜を食べる地産地消の教育にもつながっていくにちがいない。それが、結果的に農業体験学習や食育を充実していくことになる。

## 5. 学校との連携をさぐる ― 信頼関係を築く

### (1) 信頼関係を阻害する要因

エスノグラフィーを終えてまず気付いたことは、学校と地域の信頼関係が何より大事だということである。農家の方が口をそろえて言うのが、「学校が本気になっているところは、こちらもやってあげようという気持ちになる」とか「先生がよく地域の行事にでてくれるから、先生のために手伝ってあげよう」とかいったことである。これらの言葉の裏には、「先生の熱意が伝わってこないこともある」という気持ちがあるのではないだろうか。「やってもやらなくてもいい」とか「やりたくない」と思っている先生がいるとか、「農家に頼りすぎている」と感じさせているのではないか。現実はずしも、そうではない。多くの教師は熱意をもって、教育に取り組んでいるはずである。しかし、農家側にそのような印象を与えているとしたら、そこが問題である。なぜ、そうした印象を与えることになるのか。

#### ○カリキュラム編成の必要性

一つは、教師が農業体験をもちかけても、学校側が受け入れない現状があることである。農業体験は短時間、単発でできるような学習活動ではない。それを取り入れるとなると、年間の教育課程を組み直す必要が生じる。その作業が簡単ではないことが、教師の判断をにぶらせているのではないだろうか。誰でも新しいことを取り入れるときは迷い、苦勞を味わう。しかし、そこで思いきって挑戦することも教師には必要である。年間の教育課程を見直すことが第一歩になる。

#### ○食育に対する認識の低さ

二つ目は、教師全員の食育に対する理解の不足である。小学校の家庭科は、週に1～2時間という少ない授業数であり、食について学習する時間が十分でない。にもかかわらず、食育を家庭科以外で行う必要性があることへの認識が低いという問題がある。きめ細かな食育が、子どもたちの身体の健康を保ち、さらには心の安定につながることを、教師が認識する必要がある。

#### ○教師の多忙さ

三つ目は、教師の多忙さである。農業体験学習を行うとき、学校や教師一人ひとりにやる気があっても、日常の仕事の忙しさに追われ、十分な時間を費やすことができないことがある。授業はもとより、生活面においても、子どもたちが日々変化していく中で、機を逃さず適切な支援をする必要があるうえ、子どもや教師同士の関わり以外の校務も多い。加えて、栽培についての専門的な知識を学ぶ時間も機会も十分にとれない。外部講師に「頼りすぎ」が生まれる

のは、こうした状況のときかもしれない。

#### ○コミュニケーションの不足

相手の労力を考えて実施を遠慮する、現在の役割分担は合意の上だと思い違いをするなど、意思の疎通がうまくいっていないために、行き違いが生じている。人と関わる力が減少しているという現代の問題は、教師にも当てはまる。新しい人間関係を築く力を、教師も磨き続けなければならない。

#### (2) 信頼関係を築く方策

以上のような課題を抱えながら、学校と地域の信頼関係をつくりあげていくためには、どのような方策があるか。

例えば、学校の情報公開がある。学校がどのような活動が行っているか、どのような考えをもっているのかを学校だより等で地域に情報公開をしていく。現在、多くの学校では、学期に1回、月に1回と頻度は異なるが、学校の行事や地域への呼びかけをこの学校だよりを通して行っている。地域の人たちが、学校がどのような活動を行っているかを知ることができれば、学校に安心感を持ち、子どもたちの活動を応援する気持ちもおきると推測する。ただし、こうした通信から個人情報流れ出る可能性もあるので、内容や表現をよく確認した上、公開可能な情報かどうか判断しておかなければならない。

例えば、地域行事への参加がある。教師が積極的に地域行事に参加し、地域の方とのつながりをもち続けていくことは大切である。この地域行事には、子ども会行事、公民館行事、地域運動会、祭りなどがある。まず、顔と顔を合わせることに、大きな意味があると思われる。

さらには、教師が子どもと地域をつなぐことである。何より子どもたちに地域や地域の方を身近に感じてほしい。そのためには子どもたちが地域の方と関わる機会を設ける必要がある。共同の行事では互いに名札をつけ、名前を呼び合うなどして、互いに親しみを持つための工夫を柔軟に考えていく必要がある。

## 6. 教師に求められること

フィールドワークをしながら、教師と農家について考察していると、教育の専門家である教師と農業の専門家あるJAや農家、両者の違いが浮き彫りとなった。

一つ目は、打ち合わせ回数の意見の相違である。学校側は農業体験学習を取り組む際に、教育的な観点から子どもをみる。例えば、1時間の授業のねらいを考えること、学年に応じた説明の仕方をする、指示が通りやすい並び方やグループ編成の工夫など細かい点に気を配る。そのため打ち合わせは欠かせないと考える。それに対して、農家側は打ち合わせの回数が少ないほうがよいと考える人もいる。学校側からすれば農業体験に限らず校外学習を行う際には、綿密な計画を立てるのが当然である。子どもたちを集団で動かすのだから、安全を確保しながら様々な行動を想定して、細かい指示を決めておくものである。しかし、受け入れ側の農家では、細かい打ち合わせの必要感は学校ほど感じていない。それは、農業以外のことは想定が困難だからではないかと推測する。それは、学校側が子どもの活動についてすべての想定を行い、事前指導や事後指導に当たらなければならないということを示す。

二つ目は、子どもたちへの作業補助の考え方の相違である。農家側は、子どもたちに楽しんでもらえるように、失敗しないようにと手厚い補助をする場合がある。例えば、芋が掘りやすいようにつるを切っておくことなどである。これを教育者の目線でみると、手を加えないことが逆によいという見方もある。簡単に手にする成功体験だけでは子どものためにならない。子

どもたちにとって、失敗経験をもとに、自分で考え改善策をみつけ、成功に到達しようとするのが学習である。限られた時間の中で活動が円滑進めるか、試行錯誤させる方法をとるかの判断は簡単ではない。失敗の体験は子どもたちをがっかりさせるが、最後に成功体験を味わえるように計画することができれば、子どもたちのにとって楽しい経験として蓄積されるであろう。せっかくの出会いの機会に、子どものたちに失敗をさせたくないという農家の子どもに対する温かい気持ちはよく理解できる。教師も農家も、楽しませたいという願いは同じであるが、長期に関わる教師とそうでない農家とでは、そこに相違が生じる。

三つ目は、年齢による相違である。インタビューで年配の農家の方と話をする中で、急に話が転換したり、こちらがした質問に答えてもらえなかったりしたことがあった。これは、年配者によく見られることである。このようなことは、子どもが農家の方に質問をするときにも表れるかもしれない。子どもが一生懸命考えて質問をしたとき、農家の方に答えをもらえないなどである。それは、質問内容が難しかった、わからなかったというわけではなく、年配者の特性であると推測される。年配者の多くは、自分の中にある経験をもとに話をし、「これを言わないければならない」という強い思いがある。そのため、子どもの質問に臨機応変に対応できないことがある。また、子どもたちが質問すると予測した内容についてはその答えをしっかりと準備しているので、それを先に言おうとするためである。もしかしたらそのとき子どもは、相手に対して不満をもつかもしい。そもそも農家の方は、大勢の子どもたちの前に立って説明をするという機会は教師より圧倒的に少ないのであるから、子どもにわかるような話し方で話すことも、難しいはずである。その間を取りもつのが教師の役目である。この場合であれば、事前に子どもたちからの質問を書いた紙を渡しておくことや、その質問の事前、事後にわかりやすい指示を出すことを心がける必要がある。

農業体験を行う際には、様々な課題がある。それらの課題に教師がどのようにアプローチしていくか、それが解決の鍵となるだろう。農業者と学校はお互いに、「農業の知識」に関しても「教育」に関しても対等ではないということを理解しておきたい。

## 参考・引用文献

足立巳幸、1983、なぜひとりで食べるの、NHK出版

隅田浩介、2012、大学生の野菜摂取の現状と、野菜摂取と関連する要因の検討、山口大学大学院教育学研究科学学位論文 pp19-22

箕浦康子、1998、「仮説生成の方法としてのフィールドワーク」『教育のエスのグラフィー』、嵯峨野書院、pp31-46

箕浦康子、1999、フィールドワークの技法と実際 マイクロ・エスノグラフィー入門、ミネルヴァ書房、pp2-3